

# 偕行現代考

## 自衛隊と武士道

廣瀬 誠 陸自73

2017年3月8日の「JB Press」(インターネット)に掲載された部谷直亮氏の記事「自衛隊よ、武士道に入れあげていると破滅するぞ」を興味深く読んだ。今こそ深く考えるべきことを示唆されていると感じた。

部谷氏の論を要約すると、「近年、自衛隊は『武士道』の重要性を賞揚しているようだが、『武士道』の意味するところが曖昧であるうえ、旧陸軍の末期に見られた将校の視野の狭さや、現実を無視した精神性の重視など、近代軍隊に相応しいとは思えない。それよりも今やるべきなのは、『現代戦で国益を実現するために必要な自衛隊幹部の理想像とは何かを、国民的に議論していくこと』である」ということである。

詳しくは、直接、本記事を読んでいただくのが良いと思うが、その結論である「現代戦で国益を実現するために必要な自衛隊幹部の理想像」を考えることについては、私も大いに賛成である。私はこの記事を読んで、二つ感ずるところがあった。

一つ目は、旧陸軍将校の視野の狭さや、現実を無視した精神性の重視の原因が、武士道の賞揚からのみ生じたものかどうかについての疑問である。これには、わが国の置かれた地政学的位置、その文化や風土、近代化に対応する社会状況なども関係するであろう。

たしかに近代的軍隊の精神性としてどのようなものを確立するかは重要である。ただ、旧陸軍が、近代的軍隊を建設するにあたり、その精神的基盤をわが国の歴史に根ざした武士道に求めたことは、当時としてごく自然のことであり、ある意味で必然と考える。その限界があったことは確かであろう。それでも、先に述べた旧陸軍の弱点が武士道の賞揚のみに帰するとは一概に言えないと思われた。

二つ目は、旧陸軍がその末期を迎えたとときに武士道が強調されたということについてである。西欧のプロフェッショナルな軍事組織で敵を上回り勝利した明治陸軍が、その末期に「絶った」のが武士道であるとの趣旨が当該記事にも述べられている。軍事組織を支えるに必要なものが次々に失われていくときに、遂に他に支えがなくなると、最後に残ったものが武士道であったというのであろう。武士道を強調したために旧陸軍が機能不全を起こしたのは、精神要素を強調したのは、

情勢の進展に伴うやむを得ざる結果とみるべきだと感じた。

私の関心は第二の点に関係する。旧陸軍についていえば「西欧のプロフェッショナルな軍事組織がどのような背景から武士道にすがらなければならなかったのか」、精神要素が賞揚されるときというのは、軍隊を支えている他の要素に問題が起きているときではないか、ということである。この視点を自衛隊に移して考えてみると、私の関心は次のようなものになる。「もし、自衛隊の将官たちが武士道を賞揚しているのであれば、その背景にあるものは何なのであろうか」

冷戦以降、自衛隊の任務が多様化しP K O等で海外に展開する機会も増え、自衛隊員は「身の危険をかえりみず」という覚悟とともに、状況により武器を使用する可能性があるという覚悟が求められていると感じている。武士道の賞揚は、このような情勢を踏まえて自然に表明されたもの、と考えることもできる。しかし、それだけではあるまい。

いない。このような物的要素の欠乏を背景とした旧陸軍の場合とは逆に、自衛隊において武士道が強調される背景は、その精神性を支える基盤そのものにあると筆者は考える。それは次のようなことである。

第一に、自衛隊の位置づけの問題である。民主国家の近代軍隊にとつて、ハンチントンのいう「プロフェッショナルリズム」が重要であると考えられる。このプロフェッショナルリズムは、国家や社会に対する責任を有する専門職としての誇りから生まれる。例えば、アメリカ陸軍の「兵士の信条」の最初と最後の条項は、「私はアメリカ陸軍の兵士である」というアイデンティティーに関わるものである。自衛官は、自衛隊の一員としてのアイデンティティーは明瞭であるうが、肝心の自衛隊のアイデンティティーが曖昧なので、アイデンティティーが確立してるとは言えない。

これでは、プロフェッショナルリズムの確立をいくら声高に叫んでも、その基盤が与えられていないため、それを期待するのははじめから無理というものである。

これは、もちろん、個々の自衛官の責任ではない。自衛隊創設以来、軍隊と同じ任務を与えられながら、憲法との関係から軍隊ではないという状態を

放置してきた事実に戻すべきものである。

次に、法制上の問題がある。これは第一の問題とその背景である憲法に係している。冷戦終了以降、自衛隊の任務は多様化の一途をたどっている。

その中であって、PKOにおける武器使用の問題とわが国周辺の領域警備における自衛隊の権限等が問題とされてきた。前者については、「任務遂行のための武器使用」が認められる等、漸次改善されてきた。後者は、防衛出動以前の武器使用に関わる問題でいまだ整備されていないが、わが国周辺、特に離島防衛にとって喫緊の課題である。

自衛隊は、防衛出動発令以前はいわゆる軍隊と同じ行動はとれない。実際に起こりうる紛争等において、このグレーゾーンの部分は時間的にも空間的にも大きいと考えられ、この間、自衛隊は侵攻してくる軍隊に対して警察機能のみで対応しなければならぬという危険にさらされることになる。

自衛隊の将官が武士道を賞揚しているのであれば、それは、軍隊としての機能を期待されながら、軍隊としての位置づけも枠組みも十分に与えられていないことから、その精神性のもろい基盤を補おうとする自助努力の現れと、筆者には思われる。